

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成30年度病虫害発生予報第4号(7月)について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

予報第4号

<予想される向こう1か月の天候(平成30年6月30日~平成30年7月29日)>

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

前線や湿った空気の影響を受けにくいいため、向こう1か月の降水量は少なく、向こう1か月の日照時間は多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並30 高50% 高い見込み	少50 並30 多20% 少ない見込み	少20 並30 多50% 多い見込み

(福岡管区气象台 平成30年6月28日発表抜粋)

7月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	現況 (発生量)	7月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	セジロウンカ	少	並	並
	トビイロウンカ	やや少	並	並
カンキツ	黒点病	並	並	並
	ミカンハダニ	少	少	少
ナシ	黒星病	並	並	並
	ナシヒメシンクイ	やや少	やや少	やや少
カキ	炭疽病	並	並	並
	フジコナカイガラムシ	やや少	やや少	並
果樹共通	チャバネアオカメムシ	並	—	多
茶	炭疽病	少	やや少	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	並	並
	カンザワハダニ	やや少	やや多	やや多
	チャノキイロアザミウマ	少	やや少	やや少
冬春イチゴ (育苗期)	チャトゲコナジラミ	少	やや多	やや多
	うどんこ病	やや少	並	やや多
	炭疽病	並	並	並
	ハダニ類	少	やや少	並

注1) 予報の発生量は平年(福岡県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

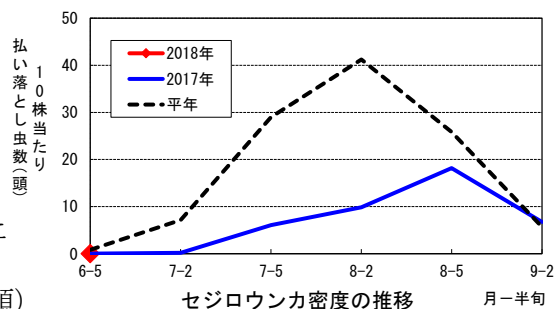
- 注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。
- 注3) 果樹共通・チャバネアオカメムシの現況は、年次変動が大きいため前年比としている。

作物別発生予報

【普通作物：水稻】

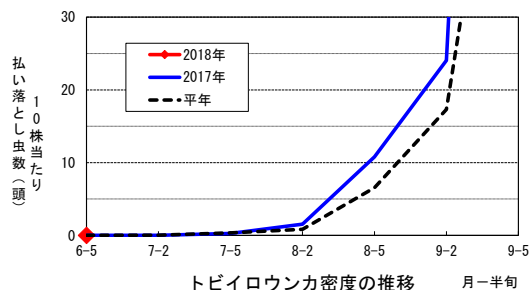
1 セジロウンカ

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 6月5半旬調査の結果、発生量はやや少であった（±～－）。
10株当たり成幼虫数0頭（平年0.8頭、前年0頭）
イ 6月1半旬～5半旬のネットトラップ及び県内5か所の予察灯ともに捕獲されなかった（－）。
ネットトラップ0頭（平年3.1頭、前年0頭）
予察灯0頭（平年9.1頭、前年0頭）
ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。
- (3) 防除上の注意
ア 飛来成虫が多い場合、産卵部位の褐変や次世代幼虫の吸汁害により、イネの初期生育が抑制されるので、箱施薬剤を施用していないほ場では、今後の飛来状況に十分注意する。
イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p9の内容を確認の上、適切に実施する。（以下の病害虫についても同様）



2 トビイロウンカ

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
10株当たり成幼虫数0頭（平年0頭、前年0頭）
イ 6月1半旬～5半旬のネットトラップ及び県内5か所の予察灯ともに捕獲されなかった（－）。
ネットトラップ0頭（平年0.1頭、前年0頭）
予察灯0頭（平年0.6頭、前年0頭）
ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。
- (3) 防除上の注意
ア 今後の飛来状況や7月中旬以降の飛来後第1世代幼虫の発生状況に注意する。
イ 箱施薬剤が施用されていないほ場や、箱施薬剤の効果低下が心配される早植えほ場では、発生状況に注意する。
ウ ほ場内では集中的に生息するので、ほ場全体での発生状況を確認する。



【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0% (平年 0.15%、前年 0.24%)

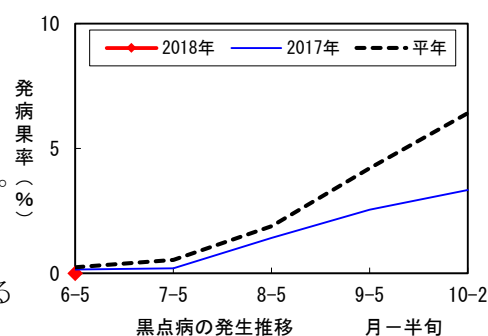
発生ほ場率 0% (平年 7.7%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている(ー)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 梅雨時期は、前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(ー)。

寄生葉率 3.3% (平年 16.9%、前年 14.6%)

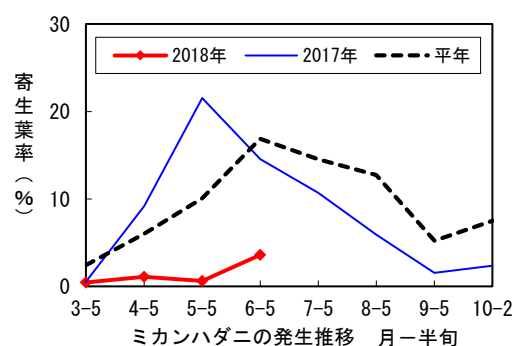
発生ほ場率 63.6% (平年 57.4%、前年 72.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

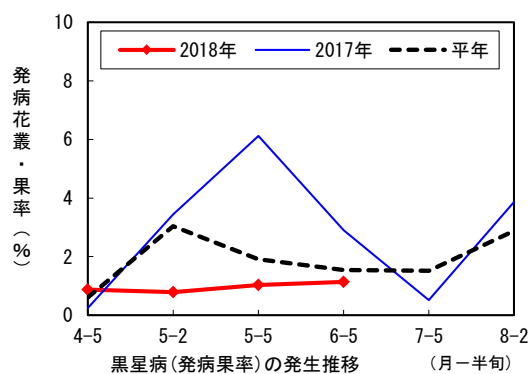
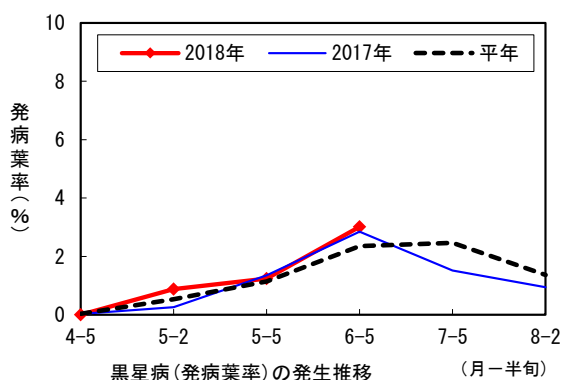
発病葉率 3.0% (平年 2.4%、前年 2.9%)

発生ほ場率 72.7% (平年 64.9%、前年 81.8%)

発病果率 1.1% (平年 1.5%、前年 2.9%)

発生ほ場率 63.6% (平年 47.7%、前年 63.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている(ー)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ウ 薬剤防除にDMI剤 (FRACコード: 3) やQoI剤 (FRACコード: 11) を用いる場合は、薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI剤の使用回数は年間で3回以内、QoI剤は2回以内にとどめる。特にDMI剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。(防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病害虫・雑草防除の手引き』3防除方法の試験研究成果等 果樹 IV ナシ黒星病菌のDMI剤感受性とDMI剤と保護殺菌剤の混用効果 (P10~12) http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/295937_53059503_misc.pdfを参照)

2 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

- ア 第1世代成虫発生時期である5月4半旬~6月4半旬のフェロモントラップの誘殺虫数は、平年よりやや少なかった(ー~±)。

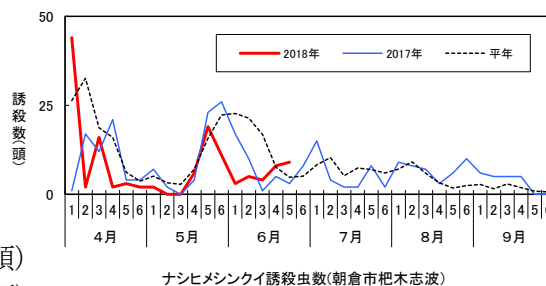
朝倉市杷木志波： 56頭 (平年 114頭、前年 86頭)

八女市黒木町木屋： 19頭 (平年 54頭、前年 49頭)

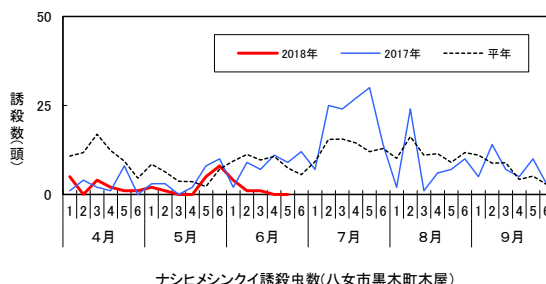
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行うが、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多くみられる場合は、1回目の防除の7~10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除にあたっては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 発生源となる被害果は埋没処分する。



ナシヒメシクイ誘殺虫数(朝倉市杷木志波)



ナシヒメシクイ誘殺虫数(八女市黒木町木屋)

【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

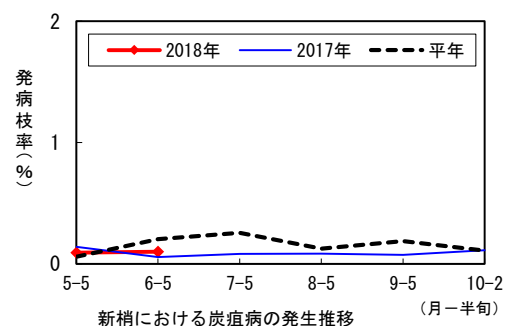
発病枝率 0.11% (平年 0.20%、前年 0.06%)

発生ほ場率 11.1% (平年 12.3%、前年 8.3%)

- イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている(ー)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

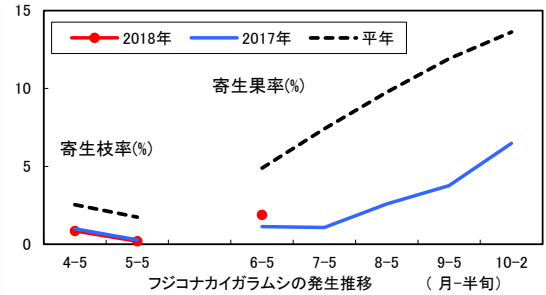
寄生果率 1.9%（平年 4.9%、前年 1.1%）

発生ほ場率 66.7%（平年65.4%、前年58.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 天敵への影響が比較的少ない薬剤を選択する。果樹カメムシ類防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年より多、前期多発年の平成26年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は平均3.8頭（前年0.9頭、平成26年4.8頭）で、前年より多く、前期多発年の平成26年並であった（+）。

チャバネアオカメムシの越冬量とヒノキ球果着生量の年次推移

	平成30年	平成29年	平成26年
チャバネアオカメムシ越冬量 (頭/㎡)	3.8	0.9	4.8
ヒノキ球果着生量 ^{注)}	4.4 中	5.0 やや多	3.5 中

注) 県下28地点のヒノキ球果着生量を達観で7段階（1：極少～7：極多）で評価。

イ 6月1半月～4半月までのフェロモントラップによる誘殺虫数は、前年より多かった（+）。

誘殺数 1,862頭（前年 221頭、平成26年 5,946頭）（調査地点：筑紫野市）

35頭（前年 8頭、平成26年 31頭）（調査地点：宗像市）

42頭（前年 25頭、平成26年 147頭）（調査地点：うきは市）

ウ 6月1半月～4半月までの予察灯による誘殺虫数は、前年より多かった（+）。

誘殺数 462頭（前年 27頭、平成26年 2,193頭）（調査地点：筑紫野市）

205頭（前年 21頭、平成26年 144頭）（調査地点：久留米市）

12頭（前年 2頭、平成26年 64頭）（調査地点：うきは市）

65頭（前年 4頭、平成26年 25頭）（調査地点：朝倉市）

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 飛来や被害発生状況は、地域や園により異なる。局所的に発生が多い地域もあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 発生状況については、病害虫防除所ホームページ病害虫の発生状況 (<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>) を参照する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	現況 (発生量)	7月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ かいよう病	並	並	並	・雨媒伝染をするため、風雨前の防除を徹底する。
なし ハダニ類	やや多	やや多	並	・多発すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に徹底防除する。
かき ハマキムシ類	少	少	少	・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかりムラがないよう十分量を丁寧に散布する。 ・ハマキムシ類の発生が多い園では、8月上旬～中旬の防除を徹底する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

発病葉数 0.0 葉(平年 0.9 葉、前年 0.1 葉)

発生ほ場率 0%(平年 30%、前年 20%)

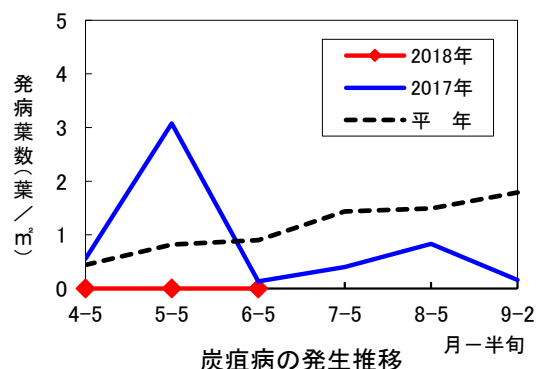
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、できる限り降雨前日までに防除を実施する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－～±)。

たたき落とし虫数 0.3 頭(平年 0.8 頭、前年 0.4 頭)

発生ほ場率 40%(平年 59%、前年 30%)

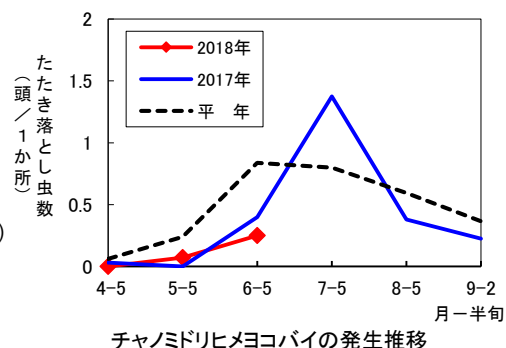
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生条件となっている(±～+)。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(B5版上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

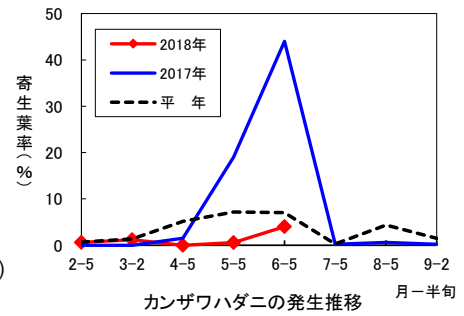
寄生葉率 4.0% (平年 7.0%、前年 44.0%)
 50葉当たり虫数 5.5頭 (平年 14.9頭、前年 100.9頭)
 発生ほ場率 50% (平年 27%、前年 90%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 多発している園では、チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマの防除と併せて、速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

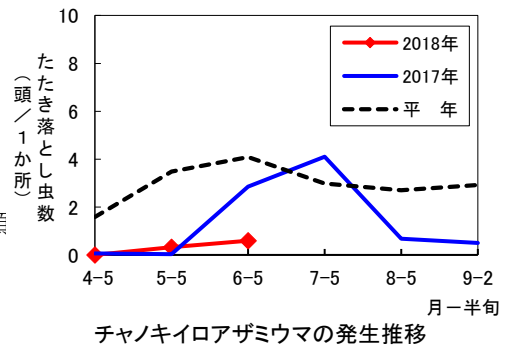
たたき落とし虫数 0.6頭 (平年 4.1頭、前年 2.9頭)
 発生ほ場率 40% (平年 76%、前年 70%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況に留意し、たたき落とし（B5版上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



5 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

寄生葉率 10.0% (平年 17.2%、前年 10.0%)
 50葉当たり虫数 12.3頭 (平年 31.8頭、前年 14.0頭)
 発生ほ場率 100% (平年 74%、前年 80%)

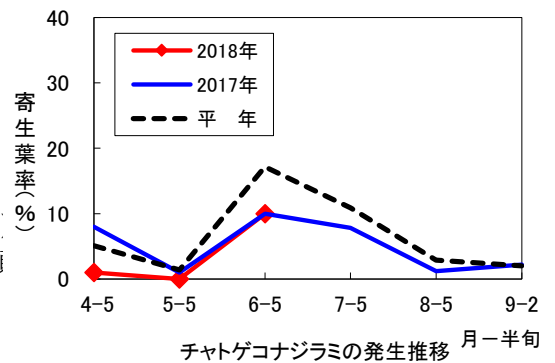
※ チャトゲコナジラミの平年値は過去5カ年平均（調査位置の変更等による）。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生を繰り返す。防除適期は若齢幼虫発生期であり、親世代成虫の発生ピークが収まった頃である。直近の成虫（第1世代）発生ピークは、7月上～中旬と予想される。

イ 幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



【茶：その他の病害虫】

病害虫名	現況 (発生量)	7月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
チャノコカク モンハマキ	並	やや多	やや多	<ul style="list-style-type: none"> 第2世代成虫の発蛾最盛期については、チャノコカクモンハマキは7月下旬頃、チャノホソガは7月上～中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 チャノコカクモンハマキ、チャノホソガのいずれも巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャノホソガ	やや少	並	並	

【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病株率 9.7%（平年 16.1%、前年 3.1%）

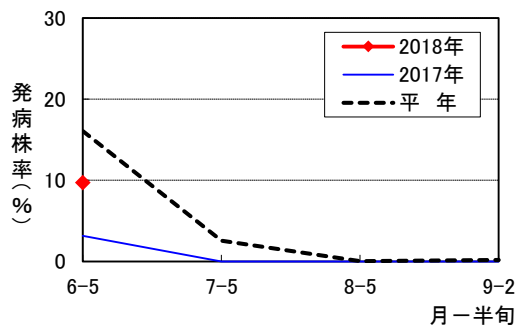
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 苗の間隔を空け通風を図る。

ウ 発生した株については葉かきを強めに行い、伝染源である発病葉を取り除くよう努める。また、摘葉後には薬剤防除を徹底する。



うどんこ病の発生推移

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.06%（平年 0.01% 前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている（－～±）。

(3) 防除上の注意

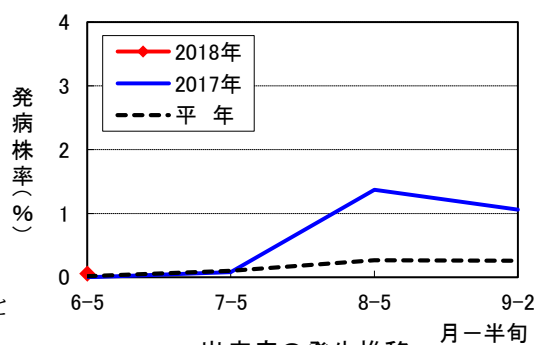
ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがある。ほ場内での発生状況に注意し、発病苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。

ウ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的に予防散布を徹底する。

エ 雨よけ育苗等でも風通しが悪いと拡大しやすいので、苗の間隔を空け通風を図る。

オ 窒素肥料を多用すると発病しやすいので、適正な肥培管理に努める。



炭疽病の発生推移

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生株率 2.1% (平年 9.2% 前年 13.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+).

(3) 防除上の注意

ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

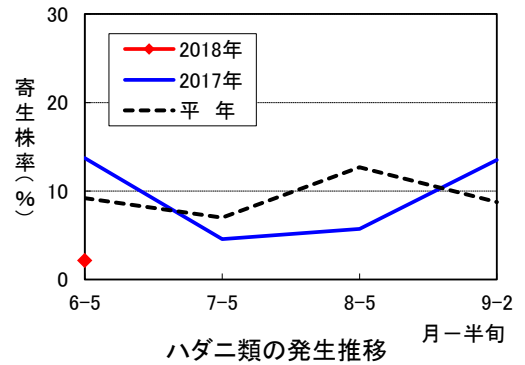
イ 葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。

ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

エ 多発後の防除は困難になるので初期防除散布に努める。

オ 抵抗性が発達しないように異なる系統の薬剤を組み合わせ定期的に防除を徹底する。

カ 土着天敵を活用するため、天敵への影響が大きい有機リン系薬剤や合成ピレスロイド系薬剤を不必要に多用することは避ける。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



最新の病害虫発生状況